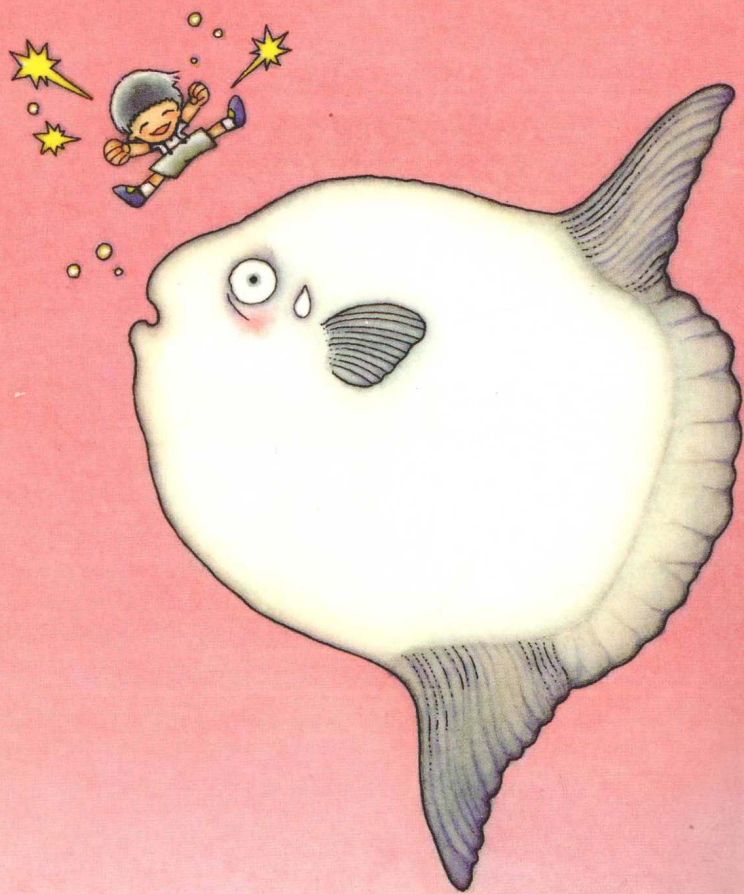


ズケモ二孫

夫杜北



孫二毛負けズ

北 杜夫



孫^マニモ負^マケズ



発行 一九九七年一月二五日
四刷 一九九七年三月五日

著者 北^{キタ} 杜^{モリヤ}夫

発行者 佐藤隆信

発行所 株式会社新潮社

162 東京都新宿区矢来町七一

電話

編集部(03)三二六六―五四二―
読者係(03)三二六六―五一二―

振替 〇〇―四〇―五―八〇八

印刷所 三晃印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

©Morio Kita 1997, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-10-306232-0 C0095

1000円

孫ニモ負ケズ

1

孫が生まれるとき、私は早くも不吉で嫌あな予感がした。だって、孫なんかできたら私は必然的に爺ちゃんとなり、それだけ死期が近づくように考えられたからである。

もっとも娘が妊娠したときは私なりに心配した。なにしろ娘は残業つづきでそれも十二時過ぎにやっと帰ってくる。おまけにほんのちょびつとの夏休みに中軽井沢の山小屋にやってきて、近くの乗馬クラブで馬に乗ったりしたから、先生が流産の危険が大きいからまだ誰にも言っちゃいけません、とか告げたそ

うだ。

更に加えて、娘の話ではカーテン方式とか言って、初めは教授だか助教授だかの偉い先生がちよつと診て、それからカーテンのうしろから若い先生が出て来て診てくれるのだそうだ。これもうくに話も聞かずろくに説明もしてくれないそうである。私はさすがに心配して、そこが慶応病院であつたから、私が神経科の助手をしていた頃まだ講師で、今は教授になつておられる物凄くガクもあり、しかも優しく親切なHOさんに電話をし、フレッシユマンでも産婦人科へ行かせて、なんとかもつと丁寧に診察してくれるよう頼んで貰えませんでした。どうかと言つたほどだ。

そしたら、超音波で撮ってみると、もうちゃんと小さな胎児の姿が映つていた。近頃の医学は何でも進歩した。私の助手だつた頃には考えもしなかつたCTスキャンだの何だの、数々の新式機械が現われた。その代わり医者ヘタクサの技術、たとえば聴診だつてぜんぜん下手ヘタクサになった。何より患者の話をやつくりと聞

き、またゆっくりと説明してくれるお医者さんはごく少なくなった。

今では胎児の超音波の断層写真によって、六、七か月目ならもう男の子だか女の子だかが分かるそうだが、ともあれお産というものはおっかないものである。

私は東北大学のインターンの実習で、お産の現状を見るようにと命令された。産室の廊下で待っていてもなかなか生まれる気配もない。看護婦さんに尋ねると、「まず十二時過ぎでしょう」と言うので、仲間と街へ酒を飲みに行つて、さて帰つてくるともう赤ちゃんは生まれている。そんなこんなで私の産婦人科の知識は素人よりもひどい。

ただ一度、お産に間に合ったことがあった。そしたら逆子サカゴが何かで取りだすのに失敗したらしく、赤ちゃんは血まみれ、看護婦さんが包帯を巻いてやつてもそれも真ッ赤ッカノカ、あんな凄じくスサマおっかない光景はどんな化け物映画にもなかった。

それでつい先日、風呂に入っていた女房に尋ねたら、

「お産なんてだいたいそんなもんよ」

と言う。

ユカ（娘の名）も血まみれだったかはおっかないから訊かず、

「お産で、痛いのか？」

「ずいぶん痛かったわよ。男なんてそんな痛みなんか知らないから、みんなあなみたいに弱虫なのよ」

と言いやがった。

もっとも私は女房が妊娠したことさえ気がつかなかった。結婚してからやっと夏を貧弱な貸別荘に暮すようになっていたが、女房が、

「あなた、なんだか体の具合がわるいわ」

と訴えても、

「そりゃ夏負けだよ。もっと運動してごらん」



と言っていた。

女房は庭でピョンピョン縄跳びなんかして、そのまま縄跳びを続けていたらしきつと流産してしまっていたことだろう。素人の奥野健男さんのほうが、「あれはきつと妊娠らしい」と正しい判断をしていた。

それから肺結核を疑って東京へ帰したら、そんな影は一向になく、ついにて産婦人科に寄ったらやはり妊娠していた。我ながらなんというヤブ医者であったことか。

女房がいよいよ陣痛が始まったときも、私にはそれが陣痛であるのか、それとも回虫がどっさり胃の中でうごめいているのかの区別さえもつかなかった。

それから、隣家の宮脇俊三さんのお母さま、これは十一人も子を産み、出産にかけてはベテランのお婆さまに訊いたら、

「北さん、そりや陣痛ですよ。すぐタクシーをお呼びなさい」と言われた。

それから私はどうしたか？ 近くのタクシー会社に電話をし、車がくるまでいきなり薬缶^{ヤカン}の湯を沸かし始めた。そこに日本酒を入れた徳利^{トクリ}を入れた。一杯やらずしては、とても気絶せずに慶応病院まで行けるかどうか危ぶまれたからである。

タクシーが着いて、私はウイスキーの小びんを持って女房と乗りこんだ。車の中でもチビチビとウイスキーを飲んだ。

なだいなだ君は奥さん、フランス人ルネさんの出産を見学したそうである。なだ君は精神医学のみならず、それこそ何でも知っているから、いざという場合、自分で出産の手伝いでもしたかったのであろう。

私は女房が産室に入ってから、そこにいた先生に、

「夫が医者である場合、妻のお産を見なくちゃいけないんですか？」

と問うた。すると先生が、

「いや、そんなことありませんよ」

と言ってくれたので、赤ん坊が血まみれになって出てくるところを見なくて済むかと、すっかり安心し、前の廊下をあっちへウロウロ、こっちをウロウロ、煙草^{タバコ}を何本も吸い、そうしていたらいくら待っても一向に生まれる気配もない。そこで近くにある私がずーっと居候^{イソウロウ}をしていた兄の医院へ行つて、かつて私が住んでいた六畳の間に寝ころがって、長いこと横になり、なんとか気を静め、それから慶応病院へ引き返したら、もう生まれてしまっていた。しかし、その赤ん坊をそのときはどうやら見なかったようだ。

それから入院していた女房を見舞いに行ったら、赤ん坊を抱いて看護婦さんがやってきた。人間の赤ちゃんなんてどうせ猿の子みたいな顔してるだろうとチラと眺めたら、果たしてその通りであった。

しかし、私は、

「可愛いねえ。さすがキミ子、お前の子だ」

と言ったのは、女房を怒らせないためであった。

すべてのお産は、このように仰々しい、そして愚かしくもおっかないものである。

さて、肝心の娘の出産のときは、私はぜんぜん見にも行かなかった。

しばらくして見に行ったら、これまた猿の子だか豚の子だか分からないような御面相であった。沢山タクサンの赤ちゃんが硝子ガラス越しの容器だか何だかにころがされている。しかし、それを見にきた爺ちゃんや婆ちゃんは、口々に、「あたしたちの孫はだんぜん可愛い」なんて言っているのである。



娘とその旦那^{ダシナ}のアパートは私の家のすぐ近くにある。娘は土、日の休日にはときどき赤ん坊を抱いてやってくる。

それで四畳半の居間の畳の上に小さなベビーベッドを置いておいた。そのうえに色とりどりのプラスチックのおモチャが吊^ツるされていて、何だかグルグルと回っている。あんなおモチャを見上げていたら、赤ん坊が目をまわして脳^{ノウ}震盪^{シントウ}を起こすかも知れないと心配したほどだ。とにかく女房と娘とがワアワアギアアギアと赤ん坊をあやすものだから、すぐそばの寝室にいる私のところ

までその声がひびいてきて、うるさくつてかなわない。

更に昔のお手伝いさんのナナちゃんが、横浜からわざわざ十萬円で買った古自動車でやってくる。ナナちゃんの次のお手伝いさんはフミちゃんだったが、これは小学校の先生になっていて、私の家から歩いて十分ほどの花の木公園のそばのアパートに住んでいるから、ときたま歩いてやってくる。

とにかく女房、娘、二人の昔のお手伝いさんが集まると、笑ったり、ヘンテコな声であやしたり、娘がまだ小さかった頃のことなんかしゃべりあったりして、そのうるさいことったら、天の岩戸に隠れたいほどであった。

私のことなんかぜんぜんかまってくれない。挨拶^{アイサツ}すらしなかったかも知れぬ。あの頃ほど孫の存在が憎々しいと思ったことはなかった。もうあらかた忘れてしまったが、とにかく孫が一歳半くらいになって、ようやく日本語のカタコトをしゃべれるようになった頃は、さすがに可愛かった。私のベッドの片端には、ボールペンだの手帖だの煙草だのライターなど、その他いろんなものが積んで

ある。幼い孫にとつては、そこは何か宝物探しのようで興味深かったようだ。

それで一家じゅうでいちばん慣れぬ私のところにチョコチョコとやってきて、

「コレ、ナアニ？」

とか、

「コレモ、ジイジノ？」

なんて言うときは、だんぜん可愛かった。娘だか旦那（かなり好男子）に似てあんがい愛くるしい顔をしている。醜惡な女房の顔に似なくて本当によかった。その代わり、隔世遺伝というのか、まぶたが腫^はれているのと、鼻の形が変てこなところが私とそっくりである。

もう少し大きくなった頃、娘が孫を連れて帰るとき、孫がチョコチョコと走って行つて、娘が、

「フミ君、ストップ」

と言うと、ちゃんと立ち止まって、左右を見まわし、車が来ないことを確か